10 功利主義と義務論

導入のQuest

MainQuest（メインクエスト）

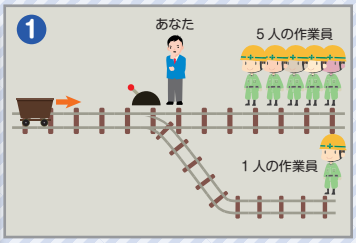
善悪を決めるのは動機だろうか，結果だろうか？

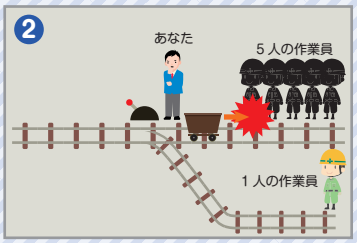
わたしたちは，なにをもって「よい行為」と考えるのだろうか。

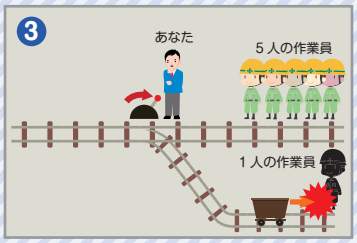
例えば，電車の中でお年寄りに席を譲るという行為について，「ふだんはやらないが，一緒にいる恋人にいいところを見せたくてやる」ということは不純だろうか。それとも，お年寄りに利益をもたらすのだから動機は関係ないと考えるべきだろうか。

SubQuest（サブクエスト）

トロッコ問題について考えてみよう。❶線路上を走るトロッコのブレーキが作動せずに暴走している。❷トロッコの進路上に5人の作業員がいて，なにもしなければトロッコにひかれてしまう。❸分岐器を作動させればトロッコの進路は変わるが，その先にも1人の作業員がいる。自分が分岐器を操作できるとするならば，どうすることが正しいのだろう。







みんなの意見

事故の大きさは被害者の数で考えられることも多いから，分岐点を切り替えることは，事故の規模を小さくしたという意味で正しい行為だと思うよ。

切り替えた先にいる1人が知り合いで，そちらを助けるためにあえて操作しないのはどうだろう。結果は同じでも違いがあるように思えるな。

犠牲者が出るとわかっていて分岐器を切り替えたら罪に問われるのかな。切り替えないことは罪ではないだろうけど。

被害者を減らすという目的のために1人の命を手段として扱うのは，人間の尊厳に対して配慮を欠く行為ではないかな。

同じ行為でも，動機が違ったら善悪の評価は変わるのだろうか。行為がもたらした結果について責任が問われるのではないだろうか。

解説 判断の基準として

功利主義：幸福の増大をもたらす行為を善とする。
幸福は快楽と苦痛の差であり，できるだけ多くの人ができるだけ快楽を得ること，すなわち「最大多数の最大幸福」をめざす。おもな思想家：ベンサム

義務論：義務にかなった行為を善とする。
すなわち，行為を導く規則ないし基準がいつでもどこでも通用するものであり，行為が誰かを手段としてのみ扱うことにならないことが必要である。おもな思想家：カント

徳倫理学：行為そのものではなく行為する人に着目する。
徳のある人がその場にいたならば行うであろう行為を善とする。おもな思想家：マッキンタイア

❹線路をまたぐ橋の上に太った男の人がいる。この人を落としてトロッコを止めようとするのは，同じ「1人を犠牲にする」行為だが，道徳性に違いがあるだろうか。

Think

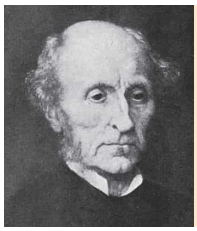
どのような基準で正しい行為と判断するのだろう

1 功利主義

ベンサム　1748～1832
イギリスの哲学者，経済学者で功利主義の提唱者。12歳でオックスフォード大学に入学し，哲学のほか法律学や経済学にも精通している。パノプティコンとよばれる，一望監視型の刑務所を考案した。のちのフーコーはこれを，近代社会で権力をもつ少数者が多数の個人を監視する状況の象徴として紹介した。著書：『道徳と立法の原理序説』

最大多数の最大幸福

ベンサムは，快楽や幸福を道徳的な善であるとみなし，それらは「強さ・永続性・確実性・遠近性・多産性・純粋性・範囲」の7つの基準によって量的に計算可能(快楽計算)であると考えた。さらに，社会の利益はこの計算によって得られた個々人の利益の総計であるとし，「最大多数の最大幸福」を道徳および立法の原理とした。そこで，個人の利己主義を制限するための外的な強制力として，物理的制裁，政治的制裁，道徳的制裁，宗教的制裁の4つを挙げ，とくに個人の幸福と社会全体の利益を一致させるための法律や政策として具体化される政治的制裁を重視した。



J.S.ミル　1806～73
イギリスの哲学者，政治学者。ベンサムの影響下にとどまらず，社会主義や実証主義にも影響を受ける。父ジェームズ=ミルはベンサムの友人で，功利主義の普及に努めた人物。
著書：『経済学原理』『自由論』『功利主義』

「満足した豚であるよりは，不満足な人間であるほうがよく，満足した愚か者であるよりは，不満足なソクラテスであるほうがよい」

ミルは，ベンサムの思想に影響を受け，快楽や幸福を善とすることは受け継ぎながらも，快楽は計算によって量的に求められるような均質なものではなく，感覚的な快楽よりも知的な快楽のほうが質が高いとして，快楽に質的差異を認めた。さらに，功利主義を利他心に基づく道徳原理として位置付け，「なにごとも自分がしてほしいと思うことを他人に施すべし」というキリスト教の黄金律に功利主義道徳の精神を見てとった。ゆえに，個人の行為を制限するものとしては，ベンサムが挙げたような外的制裁ではなく，道徳にそむいたときに感じる精神的な苦痛としての内的制裁を重視した。

また，どんなに愚かな行為と思われても，他者に危害を与えない限り，個人の自由は尊重されるべきであるとする「他者危害の原理」を説いた。

2 カント　義務論

道徳法則「なんじの意志の格率が，つねに同時に普遍的立法の原理として妥当しうるように行為せよ」『実践理性批判』

人格主義「なんじの人格やほかのあらゆる人の人格のうちにある人間性を，いつも同時に目的としてあつかい，けっしてたんに手段としてのみ扱わないように行為せよ」

(『道徳形而上学原論』)

カントは自律の自由にもとづいて行為する主体を人格と呼ぶ。はさみを使って紙を切るといった場合，われわれは「紙を切る」という目的に対する手段としてはさみを用いているが，はさみは同じ性質をもったもので代用することができ，または新しいものを買ってくることもできる。しかし，人格は置き換えもできなければ価格をつけることもできない。そうした人格を，「手段としてのみあつかう」ことを，カントは強く戒める。たとえば，電車で移動ができるのは電車の運行にたずさわる人がいるからであるように，自分の目的を達成するために誰かの働きが手段となることは必然的であるが，本人の意に反して強制的に働かせるならば，それは手段として「のみ」あつかうことになる。

このように人格の尊厳を説いたカントは，人間が互いの人格を目的として尊重する社会を理想とし，「目的の王国」と名づけた。さらに，国際社会において，これと同様に他国を尊重することによって世界平和が実現されると説き(『永遠平和のために』)，後の国際連盟の成立に大きな影響を与えた。

Column 功利主義とは何か

「功利主義って何ですか？　5分で簡単に解説してください」と無茶なお願いをしたところ，すぐに四つの特徴が挙がった。一つは，何かの行為を「よい」とか「悪い」とか評価する際に行為の結果を重視する「帰結主義」。二つ目は，この帰結＝結果の中で人々の幸福を重視する「幸福主義」。三つ目は，全体の幸福を考える「最大多数の最大幸福」，そして最後は，一人を一人以上には数えない「公平性」だ。功利主義は「自己中な考え方」と言われることがある。自分の利益だけを追求することを善しとする学説として誤解されがちなのだ。しかし，この特徴を見ると印象はだいぶ違ってくる。みんなの幸福を重視し，自分自身さえも特別扱いしない。そんな「自己中」とは反対の考え方が見えてくる。(児玉聡氏インタビュー・京都大学大学院准教授)

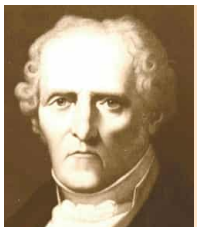
(http://philosophy-zoo.com/archives/2285)

3 社会主義

18世紀後半に，イギリスではオーウェン，フランスではサン=シモンやフーリエが，資本主義を批判し，社会主義思想を展開した。これらの思想は，後世のマルクスやエンゲルスは，彼らの人道主義的な側面を高く評価しつつも，理想的共同体にいたる過程で社会科学的考察に欠け，具体的でないと批判し，**空想的社会主義**として退けた。これに対して，マルクスとエンゲルスは，社会構造や社会主義革命の歴史的必然性を論証することによって自らの学説を**科学的社会主義**と称した。

オーウェン　1771～1858
小学校卒業後，ロンドンの店員奉公から身をおこして，イギリス最大の紡績工場の支配人となった。彼の経営する工場では，労働者のための厚生福祉施設や協同組合的店舗，あるいは世界初の幼稚園をはじめとする教育機関をおき，大成功をおさめた。

サン=シモン　1760～1825
フランスの貴族の出身で，アメリカ独立革命に従軍した。彼は，全国民の4%に過ぎない貴族や地主などの非生産者が実権をにぎっている状況を「逆立ちした世界」と批判し，資本家や科学者，あるいは労働者などの産業者が社会を管理し，支配しなければならないとした。



フーリエ　1772～1837
フランスの豊かな商人の子として生まれるも，フランス革命の影響で破産し，仲買人の仕事をしながら思索活動を展開した。彼は資本主義の矛盾点をとくに商業にもとめてこれを批判し，農業を中心とした理想的共同体であるファランジュを構想した。

Column マルクスによる環境危機の予言

「資本主義の歴史を振り返れば，国家や大企業が十分な規模の気候変動対策を打ち出す見込みは薄い。解決策の代わりに資本主義が提供してきたのは，収奪と負荷の外部化・転嫁ばかりなのだ。矛盾をどこか遠いところへと転嫁し，問題解決の先送りを繰り返してきたのである。

実は，この転嫁による外部性の創出とその問題点を，早くも19世紀半ばに分析していたのが，あのカール・マルクスだった。

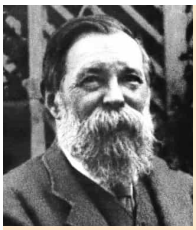
マルクスはこう強調していた。資本主義は自らの矛盾を別のところへ転嫁し，不可視化する。だが，その転嫁によって，さらに矛盾が深まっていく泥沼化の惨状が必然的に起きるであろうと。

資本主義による転嫁の試みは最終的には破綻する。このことが，資本にとっては克服不可能な限界になると，マルクスは考えていたのである。」（斎藤幸平『人新世の「資本論」』）

解説　環境問題をはじめとする現代社会の課題を考えるとき，資本主義の問題点を分析したマルクスの視点は，わたしたちに重要な示唆を与えてくれる。

4 科学的社会主義

マルクス　1818～83
ドイツの思想家，経済学者。エンゲルスとともに科学的社会主義を確立した。1848年の2月革命において，エンゲルスとの共著『共産党宣言』のなかで「万国の労働者よ，団結せよ」と呼びかけ，1864年に第一インターナショナルを設立。後世は，エンゲルスの援助のもと，執筆活動に専念。ヘーゲルやフォイエルバッハなどの思想をもとに，資本主義の分析を通じて共産主義に至る過程を説いた。著書：『経済学批判』『資本論』『経済学哲学草稿』など



エンゲルス　1820～95
ドイツの裕福な紡績工場の経営者の家に生まれる。高校中退後，父を手伝いながら哲学や経済学を学ぶ。マルクスとともに弁証法的唯物論を基礎付け，科学的社会主義を打ち立てた。のちにマルクスを経済的に援助し，マルクスの死後は彼の遺稿を整理するとともに，社会主義運動を指導した。
著書：『空想から科学へ』など

マルクスは，フォイエルバッハの影響を受けて，人間を類的存在であるとした。これは，人間は個々に生命活動を行うだけの特殊的存在ではなく，それ自体が類として，すなわち道徳や人類愛などを意識できる普遍的な存在だということである。マルクスは労働を人間の本質とし，労働を通じて自己の本質を実現していく存在であると考えた。

ところが，資本主義社会では，人間にとって本質であるはずの労働が苦役となっていると指摘する。

本来，労働の結果としてつくられた生産物は，生産者である労働者の所有物となるはずである。ところが，土地や工場など，利益を生産するための生産手段は資本家の私有物であり，生産手段をもたない労働者は自らの労働力を商品として資本家に提供することによって賃金を得る。このため，生産物が資本家の所有物となり，またそれは同時に商品となって売買の対象となる。こうして，労働力と労働によって生産される生産物は，同様に商品として対立することになり，このことをマルクスは「生産物からの疎外」とした。

そのため，本来人間の本質であり，喜びであったはずの労働が苦役と化してしまうことから「労働からの疎外」が生じる。それによって，本来労働によって類的本質を実現していた人間が社会的連帯を意識することができなくなり，個々人が生存のための労働をするにとどまる特殊的存在になってしまうことによる類的存在からの疎外，さらに人間的本質を欠くことによって人間同士が対立しあう，「人間の人間からの疎外」という状況にいたるとマルクスは指摘した。

テーマ学習 現代の政治思想

■ リベラリズム・ロールズ

ロールズ 1921～2002
アメリカの政治哲学者。リベラリズムは，単純に訳せば「自由主義」ということになるだろうが，ここでは「経済的弱者に自由な行為を保障する」という意味で自由が尊重されており，社会保障などの政策を充実させることが主張される。

ロールズは，社会契約説にいう自然状態を「原初状態」ととらえ直し，架空の話し合いの場を想定する。その話し合いでは，自分や他人についての個人的情報が「無知のベール」によって隠されなければならないとする。

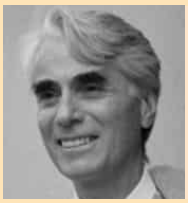
そこではまず第一の原理として，誰もが政治的・精神的に自由であるべきだということが認められる。さらに第二の原理として，社会的な不平等について，「最も不遇な立場にある人の期待便益を最大化すること」と「公正な機会の均等という条件のもとで，すべての人に開かれている地位や職務に付随するものでしかないこと」という条件を満たすべきであるとした。例えば，「特定の人だけにお金をあげる」のは不平等であるが，生活保護は不遇な立場の人を利するものであるから認められるのであり，特権的な地位の世襲は，その地位がすべての人に開かれていないのだから認められない，ということができる。「無知のベール」という前提にもとづけば，誰もが社会的に弱い立場になりうるのであるから，これらの原理は論理的に導かれるとともに，道徳的に裏付けられると説いた。

■ アマルティア＝セン

アマルティア＝セン 1933～
インドの経済学者，哲学者。
ロールズに影響を受けつつ，批判的に独自の立場を展開したのがセンである。センは，従来の経済学で想定されていた，自身の利益を最大にしようとするものという人間像を「合理的な愚か者」と批判した。

人間には，自らの不利益を承知の上で，あえて他者に配慮する一面があることが見過ごされているという。さらに，所得や富の平等を理想視する福祉のあり方を再検討し，「どのような生き方が可能になるか」という点に着目した「潜在能力アプローチ」を提唱した。例えば，コンピュータはインターネットで世界中の情報を集めるのに有用なものであるが，文字が読めなかったり目が不自由だったりする人にはその効用が実現されない。従来の福祉の考え方はコンピュータをすべての人に配るあり方だったのに対し，すべての人が効用の面で平等になることをめざすべきだと説くのである。

■ リバタリアニズム・ノージック



ノージック 1938～2002
アメリカの哲学者。リベラリズムが政府による積極的な福祉の向上を唱えるのに対し，それは個人の自由を制限するものであると反論するのがノージックらのリバタリアニズム（自由至上主義）である。

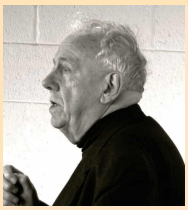
ノージックは，所有物に関わる所有の正当性を「エンタイトルメント」（権原）という語で表している。各人は自分の身体の所有者であり，自分の行為について自己決定することができる。同様に，正当に取得したものについては自己決定にもとづき自由に移転できる。だから，困っている人がいたとしても，その人に自分の所有物を分け与える義務はない。ゆえに，国家による所得の再分配は越権行為だと主張する。こうした立場からノージックは，国家の役割は盗みや暴力などによる所有権の侵害から国民を守ることに限られるとして，「最小国家」を主張した。

■ コミュニタリアニズム・サンデル

サンデル 1953～ アメリカの哲学者。
リベラリズムとリバタリアニズムは対立するが，個人の自由に重きを置く点では共通している。いずれも個人が「自由な自己決定の主体」であると主張するのに対し，サンデルはそれを「負荷なき自己」と批判した。

人は家族や地域社会あるいは時代などにより，さまざまな人とかかわり合い，影響を受けている「状況に位置づけられた自己」であり，それらを完全に排除した自由な自己決定はあり得ないと主張する。このように，個人に影響を与える共同体を重視する立場をコミュニタリアニズム（共同体主義）という。

「人間はポリス的動物」と唱えた古代ギリシャの哲学者アリストテレスは，政治は善い生き方を学ぶものであり，市民に美徳を備えることが政治の目的であると説いた。サンデルはこれを再評価し，共同体に生きる人びとが共有する「共通善」を議論によって構築していくことと，政府が国民の美徳を育成していくことを説いた。



マッキンタイア 1929～
スコットランドの哲学者。義務論と功利主義の対立に対して，どのように行為するかではなく，どのような人間になるかを問題にし，有徳な人物のあり方を考察する徳倫理学を説く。ロールズらのリベラリズムを，規則に従うことを理性的としているがその目的が明確でなければ道徳的でありえないと批判し，アリストテレスの再評価を通して，共同体の構成員が共通善を共有すべきと主張した。マイケル・サンデルらとともにコミュニタリアニズムの論客とされるが，本人は必ずしもそれを歓迎していない。主著『美徳なき時代』

テーマ学習　生命の尊重

■ ガンジー

ガンジー　1869～1948
インドの名門政治家の息子として生まれる。ロンドン留学後，弁護士を開業，南アフリカで厳しい人種差別に接する。1915年に帰国，スワラージ（自治・独立）・スワデーシー（国産品愛用）の綱領を掲げて反英独立運動の先頭に立ち，インドを独立に導いた。独立運動に際しては徹底的な非暴力主義・不服従運動を貫き，宗教対立の和解や「不可触民」の差別廃止の運動に力を注ぎ，インド国民に「マハトマ（偉大な魂）」と親しまれた。しかし，狂信的なヒンドゥー教徒に暗殺される。主著に『インドの自治』『自叙伝』がある。

ガンジーの生命尊重の思想は，次のようなことばで語られている。

●**アヒンサー**　インド古来の思想であり，ガンジーの根本思想の一つで不殺生のこと。「不殺生」とは，殺生をしない，他の生命に危害を加えないことだけを意味するのではなく，邪念，虚言，憎悪，呪いなどによって直接，間接に苦しみをあたえないことを意味する。アヒンサーに基づく徹底した非暴力・不服従運動を展開した。

●**ブラフマチャリヤー**　「自己浄化」と訳される。献身や奉仕を実践するためには，肉体と精神の両方の要求を満たすことはできないと考え，徹底した厳しい禁欲の誓いをたてた。

●**サチャグラハ**　「真理の把持」を意味する。宇宙の根源にある真理を把握し，その真理を自己の生き方や社会において実現することをいう。

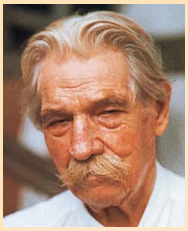
この目標に向けて，肉体的節制をはじめとする厳しい禁欲を自己に課すブラフマチャリヤー（自己浄化）とアヒンサー（不殺生）の実践を説いた。

Column　現代のヒューマニズム

現代の代表的なヒューマニズムの思想家には，シュバイツァーやガンジーの他に，ロマン・ロラン(1866～1944)やラッセル(1872～1970)などがいる。

ロマン・ロランは，『ジャン・クリストフ』でノーベル文学賞を受賞し，反戦・反ファシズム運動を行った。また，ラッセルは，反戦平和，活動を続け，第二次世界大戦後は原水爆禁止運動を行った。

■ シュバイツァー



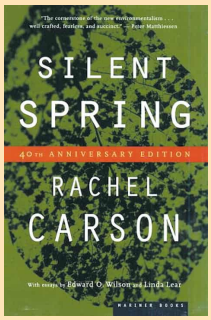
シュバイツァー　1875～1965
ドイツ領（のちフランス領）アルザスに牧師の子として生まれる。恵まれた環境に育ち，21歳の時に「30歳までは学問と研究に生きることが許されているが，その後は人間に直接奉仕する道を進む」と決意した。そして，30歳になると，赤道アフリカ地方の窮状と医師の不足を知り，医学部の学生となる。6年後，夫人とともにガボン（現ガボン共和国）のランバレネへ行き，私財をなげうって病院を建て，現地の人々への医療奉仕とキリスト教伝道に従事した。「生命の畏敬」の理念から2度の世界大戦を批判し，「アフリカの聖者」と称された。1952年には，ノーベル平和賞を受賞し，その後も原水爆実験の中止を訴え続けた。主著に『水と原生林のはざまで』『文化と倫理』などがある。

シュバイツァーは，生きとし生けるものへの愛を説く「生命への畏敬」の倫理をかかげた。「**生命への畏敬**」とは，「私は生きようとする生命に取り囲まれた生きようとする生命である」という認識と自覚にたち，生きとし生けるものの生命をいつくしみ，大切にするという考え方である。そして，生命の本質は，「じゅうぶんに生き抜こうとすること」である。そして，このような願いは，私たち自身と同じように，すべての人間，すべての動・植物においても厳然と備わっている。わたしたちの倫理の根本は，自分自身の生命に対するのと同様の気持ちで，他の生命をいとおしみ，大切にしていくことなのである。

■ レイチェル＝カーソン

レイチェル＝カーソン　1900～64
アメリカの海洋生物学者で，時事評論家。1962年に『沈黙の春』を刊行し，当時大量に使用されていたDDT（殺虫剤）をはじめとする農薬が自然環境を破壊することを警告した。

産業界からは，激しい攻撃を受けたが，環境問題に関する議論が湧（わ）き上がり，マス-メディアも取り上げるようになった。ケネディ大統領も化学物質がもたらす環境汚染問題の調査に乗り出した。『沈黙の春』は，1970年の環境保護局設立の契機となり，アメリカの環境政策に重要な影響を与えた。

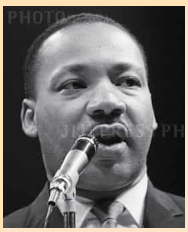


"Silent Spring"by Rachel Carson, Boston, Houghton Mifflin Company (2002)

解説　日本では，水俣病患者や家族の壮絶な姿を記録した石牟礼道子『苦海浄土』や，毒性物質の複合による人体の影響を訴えた有吉佐和子『複合汚染』などの著作がある。

■ キング牧師

1963年8月28日の「ワシントン大行進」における，「I have a dream.」と題される彼の演説にあらわれているように，彼の理想は黒人の地位を高めて白人に勝利することではなく，さまざまな人種がひとしく尊厳ある存在として共存することであった。



M.L.キング Jr.　1929～68
アメリカ合衆国ジョージア州に牧師の子として生まれ，黒人差別の強いアラバマ州の牧師となる。モンゴメリーのバス-ボイコット運動をはじめ，黒人公民権運動の指導者となった。インド独立の指導者ガンジーに強い影響を受け，非暴力主義をつらぬいて公民権法案の成立を勝ち取り，ノーベル平和賞を受賞したが，1968年，非暴力主義に反対する急進派の黒人に暗殺された。

I have a dream

さてわが友よ，われわれは今日も明日も困難に直面しているが，私はそれでもなお夢を持つと申し上げたい。それはアメリカの夢に深く根ざした夢である。私はいつの日かこの国が立ち上がって，「われらはこれらの真理を自明のものとして承認する。すなわち，すべての人は平等につくられ……」というその信条を生き抜くようになるであろう，という夢を持っている。私はいつの日かジョージアの赤土の丘の上で，かつての奴隷の子孫と奴隷主の子孫とが，兄弟愛のテーブルに一緒に座るようになるであろう，という夢を持っている。

そして私は，私の四人の小さな子供たちがいつの日か，皮膚の色によってではなく，人格の深さによって評価される国に住むようになるであろう，という夢を持っている。私は今日夢を持っている。

（1963年8月28日，ワシントンでの演説）

解説　現代にも残る人種差別　こうしたキングの「夢」にも関わらず，2020年になっても，「BLACK LIVES MATTER」という反人種差別の抗議運動が全米に広がっている。白人警官によって黒人の被疑者が不当に逮捕されたり，逮捕の際に抵抗したとして殺されたりしているのも現実である。

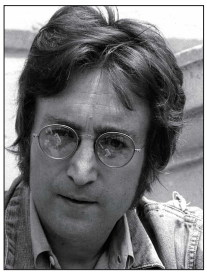
■ マザー＝テレサ

マザー＝テレサ　1910～97
現北マケドニア領のスコピエに生まれる。本名アグネス＝ゴンジャ＝ボジャジュ。18歳でアイルランドのロレット修道会に入りインドに派遣された。シスターとなってテレサと改名。カルカッタの女学校で歴史や地理などを教えたが，「貧しきものたちと共にあれ。貧しきもののために働け」という神の声を聞き，貧困者を救済する活動をはじめた。インド国籍を取得し，1950年に，慈善団体「神の愛の宣教者会」を設立し，このころから「マザー」とよばれる。この団体では，孤児院やハンセン病患者のための医療施設，そして見捨てられた病人を収容する「死を待つ人の家」などを設立した。1979年にノーベル平和賞を受賞。1997年9月5日に87歳で死去した。

マザー＝テレサは，飢えや欠乏などの物質的な貧しさよりも，それらの人々の精神的な貧しさ，すなわち，だれからも相手にされず孤独を感じていることを強く問題視した。彼女の設立した施設は，たんに食料や衣料などの物質を与える場ではなく，かけがえのない一人の人間として接し，自分のことを気にかける人がいるという実感を与える場である。欠乏のなかにある人を理解するためには同じ生活をしなければならないと説いた彼女は，死の床にありながら特別な医療を拒否することで自らの信念をつらぬいた。

マザーは次のように語った。「この世の最大の不幸は，貧しさや病ではない。むしろそのことによって見捨てられ，誰からも自分が必要とされていないと感じることである」「神に対する私たちの愛は，どれだけの仕事をするかではなく，大切なことはその心です。」

Column　ジョン＝レノン



1940年リヴァプール・ウールトン生まれ。ポール＝マッカートニーやジョージ＝ハリスンらとビートルズ(The Beatles) を結成。ビートルズ脱退後も，音楽を中心とした平和活動を展開する。1969年オノ＝ヨーコと結婚。1971年に「Imagine」を発表。その後，ベトナム戦争を批判するなどしてアメリカ政府から危険視される。1980年12月8日，熱狂的なファンに銃殺されてこの世を去った。

平和運動を展開し，人種差別，女性差別の撤廃をうったえたジョン＝レノンは，「Imagine」のなかで，国家や宗教の対立，あるいは貧富の格差を越えて，地上に生きる一人ひとりの人間として共存することを呼びかけている。

歌詞の最後の部分には，こうした理想を空想として退けることなく，一人ひとりが問題意識をもって取り組んでいくことによって世界が変化するという彼の思想がくみとれるのではないだろうか。